

2018年9月25日

日本心理学会 第82回大会

シンポジウム「宗教心理学的研究の最前線」

宗教認知科学の可能性 —心理学と宗教学の共同研究の現状—

東京大学人文社会系研究科 博士課程

藤井修平

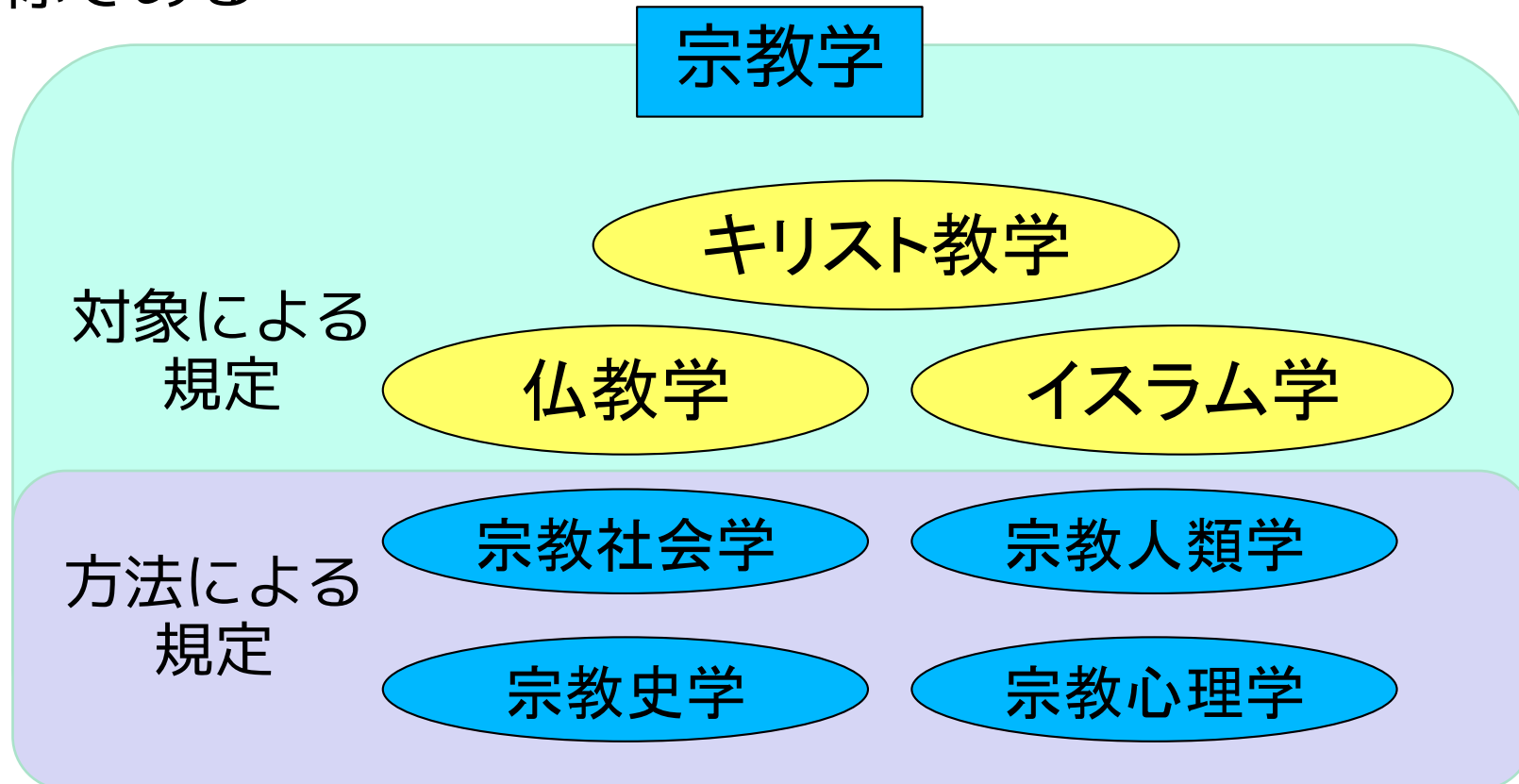
yrsk.f@nifty.com

本発表の目的と内容

- 宗教学という分野の概説
- 宗教学の内部から生まれた、認知科学・心理学的知見を取り入れた分野である宗教認知科学（CSR）の概要と最新状況の紹介
- それらを通して、心理学と宗教学が協力して研究を行う道を検討する

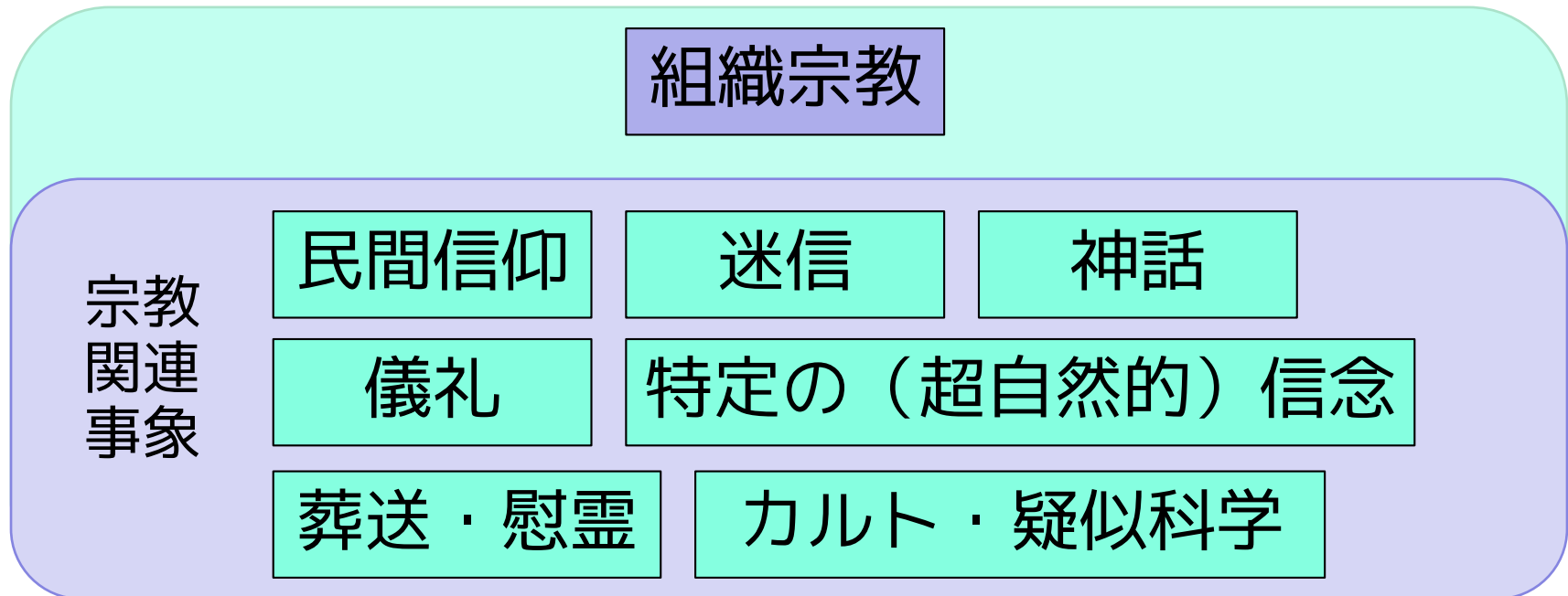
宗教学とは

- 宗教学とは、広義には宗教を研究するあらゆる学問の総称である



宗教学の研究対象

- 「宗教」とは何かについては長年論争が続けられているが、キリスト教や仏教など組織化された宗教以外にも、宗教に関連するさまざまな現象が研究対象となってきた



宗教学における宗教心理学の理解（１）

『宗教学事典（渡辺 2010）』では宗教心理学は、

- ① 初期 E. D. Starbuck, W. James, J. H. Leuba
- ② 深層心理学 S. Freud, C. G Jung
- ③ 社会科学的 E. H. Erikson, E. Fromm
- ④ 代替宗教としての心理学 P. Rieff, G. W. Allport
- ⑤ トランスパーソナル K. Wilber, S. Grof

に分類されて紹介されている

宗教学における宗教心理学の理解（２）

- 同様に、宗教学者の堀江（2009）は宗教心理学の歴史を詳述しているが、彼は「宗教的心理学」と「実証的宗教心理学」の二極化が存在していることを認識した上で、思想運動としての心理学を研究するために James, Jung, Fromm, Erikson, Maslow, Franklなどが含まれる前者のみを研究対象としている

総じて、「宗教を心理学する」のではなく、「宗教心理を研究する」ものが宗教心理学とされてきた

宗教認知科学（CSR）の成立

- そうした状況において、心理学を含めた自然科学的な研究方法を宗教学に導入する試みが20世紀末に行われた。その主導者が立ち上げたのが「宗教認知科学（cognitive science of religion, CSR）」である
- そのようなCSRの代表的研究者としては、E. Thomas Lawson, Robert McCauley, Pascal Boyer, Harvey Whitehouse, Justin L. Barrett, Ilkka Pyysiäinen, Luther H. Martinが挙げられる

心理学と宗教学の結びつき

- 宗教学者E. Thomas LawsonとRobert McCauley（1990）、人類学者Pascal Boyer（1994）とHarvey Whitehouse（1995）はそれぞれ、認知科学・認知心理学の知見を応用した宗教に関する理論を提示した
- 彼らが独自ののは、実験心理学の方法によって自説の検証を試みたことであり、これにより心理学的手法によって宗教現象を取り扱う研究の先鞭がつけられることになる（Barrett & Lawson 2001; Boyer & Ramble 2001; Richert, Whitehouse, & Stewart 2005)

ボイヤーの直観的オントロジー

- Boyerは、人間の認知を「直観的」「反省的」に区分し、直観的思考は普遍的な素朴理論を形成するという考えを援用している

素朴心理学	人は五感の範囲内でのみ知覚できる 植物は人の言葉を理解しない 無機物に感情はない
素朴生物学	人は生存のために食物が必要である 植物は有機物からできている 鉱物が産まれることはない
素朴物理学	人は可視的である 生物は二箇所に同時に存在できない 植物には重さがある

反直観的概念

- この素朴理論によって信じられていることを反転すると、「反直観的概念」が得られる

素朴心理学	遠くの出来事を知ることのできる人間 人の話を聞く樹 無視されたと感じるハンマー
素朴生物学	食物の必要のない人間 金属でできた樹 産み出される鉱物
素朴物理学	不可視の人間 複数の場所に同時に存在する生物 重さのない樹

反直観的概念＝宗教的信念

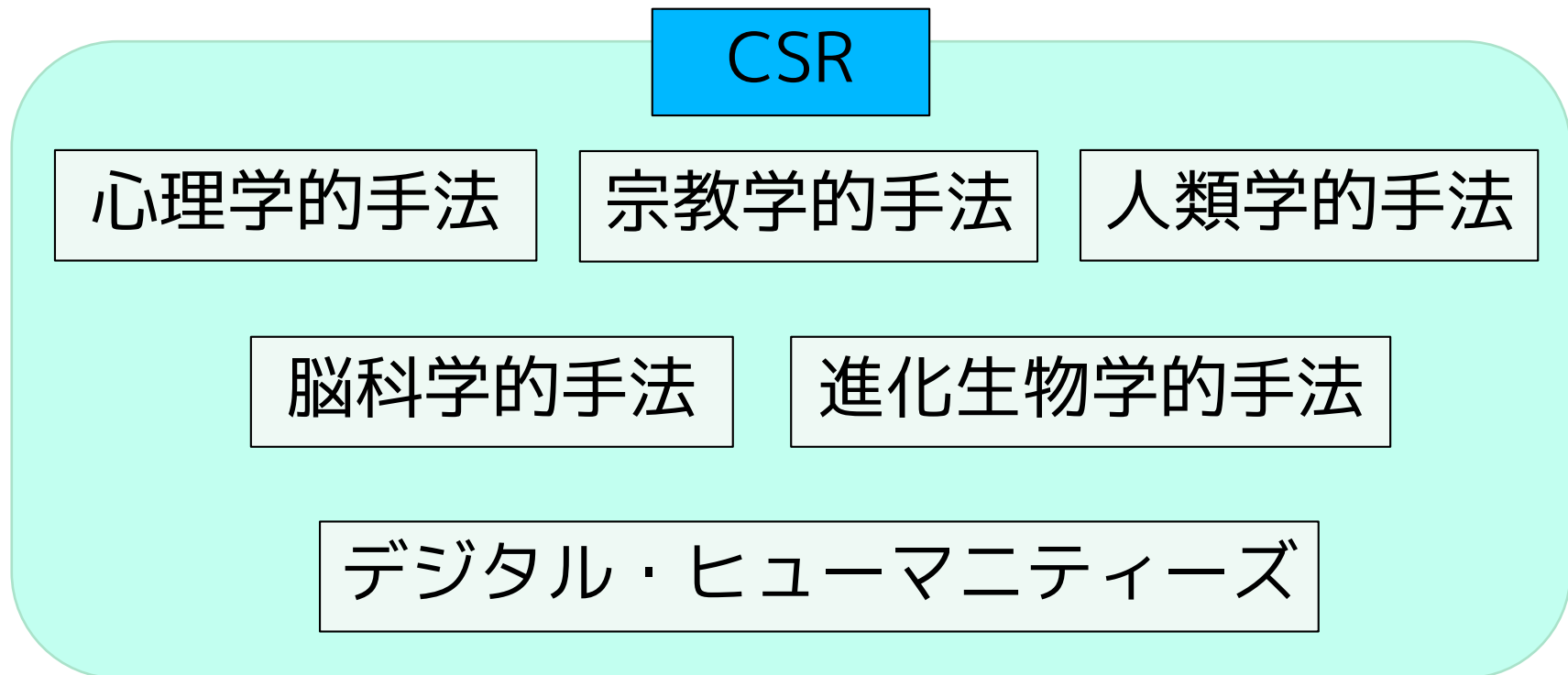
- Boyerはこうした「反直観的概念」が宗教的信念であり、それは直観から生まれるがゆえに普遍的であると同時に、直観的予測を裏切っているために人々の注目を引き、記憶に残りやすく、それが保存されて「宗教」を形成すると考えた
- つまりBoyerにとっての宗教とは、人々がランダムに考案する観念の中の反直観的なものが記憶され、伝達されて形成された「通文化的な反復パターン」である

ボイヤーの実験

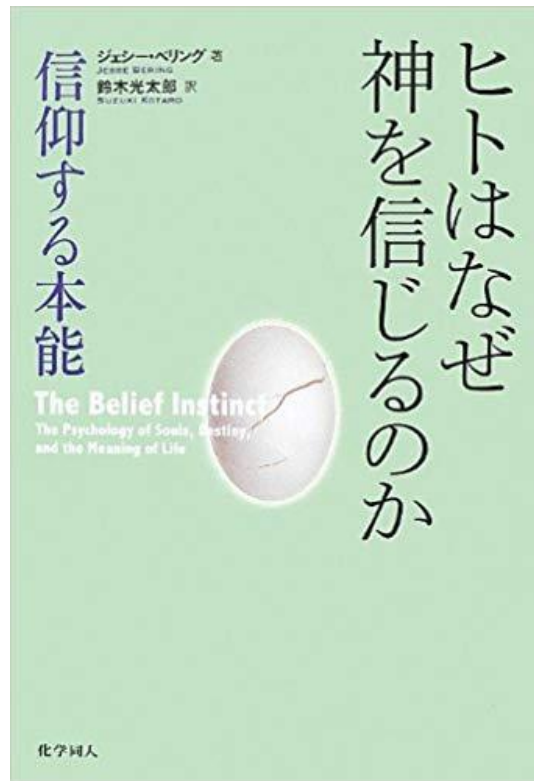
- 「存在論的カテゴリーに対する予測を裏切る反直観的概念は、そうでない概念に比べて記憶されやすく、それゆえ広範囲に広まり存続しやすい」という仮説の検証のための5つの実験（Boyer & Ramble, 2001）
- 存在論的カテゴリーの違反を含んだ12の記述と、同数の違反を含まない記述が登場する文章を参加者に読ませ、その後思い出せるものを書かせるという手続き
- 違反を含む記述がそうでない記述よりも想起されやすいならば、仮説は支持される
- 同様の実験は何度か行われている（Barrett & Nyhof, 2001; Banerjee, Haque, & Spelke, 2013）

CSRの包含するアプローチ

- CSRは、さまざまな現代的アプローチを取り込み、相互に連携を行いながら宗教の研究を進めている



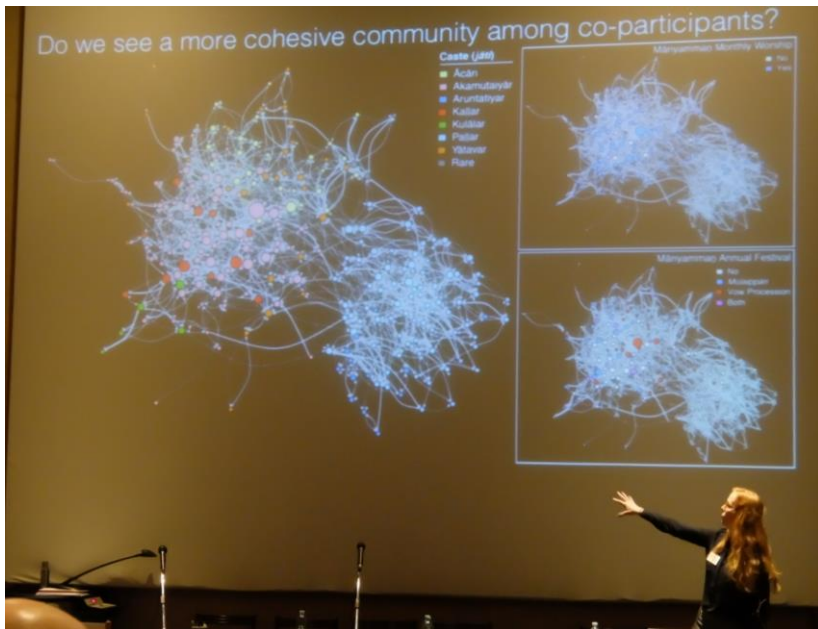
CSRの代表的著作



CSR研究の拠点と研究者・研究所



近年のCSRの研究大会



Future Directions on the Evolution of
Rituals, Beliefs and Religious Minds, in Italy

Nordic Network for the Cognitive Science of Religion, in Denmark



7th Biennial Meeting of the International Association for the Cognitive Science of Religion, in the US

現在CSRで行われている研究（１）

- CSRにおける心理学的研究が現在取り扱っている理論や仮説は多岐にわたるが、いくつかは大別することができる

① 宗教を生む心的メカニズム・バイアス

反直観的概念、擬人観、目的論、行為者検知、心の理論、二元論、迷信行動など

その現象が普遍的なことを示し、宗教と結びつけて説明するものが主

例：超常現象の信奉者は、懐疑派に比べて動作認知課題でより多くの行為者を検知しやすい (van Elk 2013)

現在CSRで行われている研究（2）

② 宗教集団に所属することの影響

集団内協力・道徳性・信頼性・自制・恐怖や不安の低減

宗教的なグループとそうでないグループを比較するか、宗教的要素（教典や祈りなど）のプライミングを行い、ゲーム等でこれらの要素を測定する

Supernatural Punishment Hypothesis (Johnson 2015)：人の行動は神などの罰への恐怖に影響される

Credibility Enhancing Displays, CREDs (Henrich 2009)：宗教集団のメンバーのコストリーな振る舞いは集団内で信頼を得る効果がある

現在CSRで行われている研究（3）

③ 実際の宗教集団のフィールド実験

極端儀礼・カルト・過激派などが主な対象

一見して適応的とは思えない行動を行う集団が、なぜ存続できるかの説明を試みる (Xygalatas 2012)



現在CSRで行われている研究（４）

④ 子供の示す傾向性と宗教の関係

Piaget的な方向性を継承し、子供の擬人観・人工論・目的論などと宗教の結びつきを推定する

例：子供は生物が死んだ後も、認知的能力は存続していると考えやすい (Bering & Bjorklund 2004)

⑤ 特定の精神疾患と宗教の関係

宗教を形成するとされる能力（心の理論等）に影響を及ぼす自閉症スペクトラム障害や強迫性障害などの精神疾患を有する人の宗教への姿勢を調査する (Deeley 2009)

現在CSRで行われている研究（5）

⑥ 宗教と健康

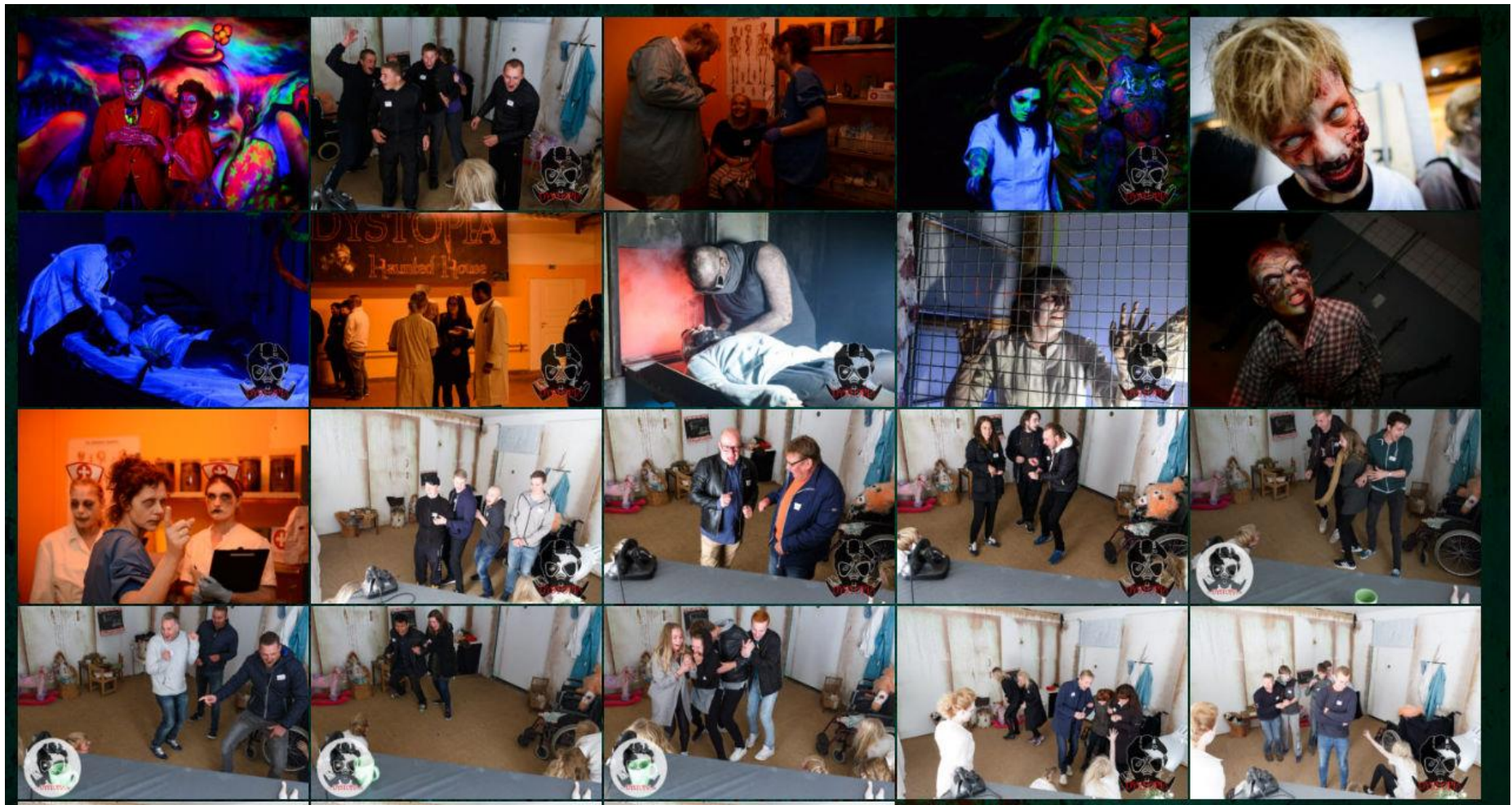
宗教の適応的側面の中でも、とりわけ健康とWell-beingへの臨床的影響に着目するもの

例：宗教の健康改善への効果を示した多数の論文のレビュー (Koenig 2012)

⑦ 宗教と無宗教の比較

宗教が人間の認知能力に由来する自然的なものなら、無宗教や無神論の人は無理をしているのか？科学信仰など別の信念体系には同様の効果はあるか？あるいは「スピリチュアルな人」についてはどうか？

(Caldwell-Harris 2012)



オーフス大学のMathias Clasen主導の
お化け屋敷制作プロジェクト「Dystopia」

CSRもたらした成果

- McCauley & Lawson (2017: 130-138)によると、これまでCSRは4つの大きな「効果」を発見してきた

1. 神学的インコレクトネス

教義上は正しい複雑な考えを想起や要約する際に、より直観的な観念に引きずられるバイアスがかかる

2. 無差別の目的論 3. 死後の生の存続

子供は、周囲のものを何らかの目的のためにデザインされたと考えやすく、死後にも認知的能力は存続すると考えやすい

4. 最小反直観的(MCI)宗教表象

直観的に形成されたカテゴリーからわずかに逸脱した表象は記憶や伝達がされやすい

心理学にとってのCSRの意義

- 宗教学は仮説の宝庫（Müller, Frazer, Malinowski, Durkheim, Otto, Girard, Eliadeなど理論は多数）
- 「再現性の危機」を改善できる（これまで扱われてきた宗教に偏りがある）
- 隣接分野との協力により、宗教に関してより多面的な研究を行うことができる
- 個別的研究に比べて、宗教の定義や普遍性の問題を宗教学の知見に照らし合わせて修正できる

懸念される問題点

- 扱うテーマ自体の難しさ
- 研究対象へのアプローチの難しさ・倫理的問題
- 宗教になるおそれがある（Newbergの神経神学など）
- 宗教という巨大な集団と結びつくことにより、利益相反が起こりうる（John Templeton財団の例）
- 人文学系研究者の無理解（還元主義という見方が大勢）

これらの問題も、個別的研究よりは集団的に研究する方が軽減することができる

まとめ

- 宗教学は宗教を対象とするあらゆる研究を包含してきたが、実験心理学については未着手だった
- その欠点を補うべく生み出されたのが、宗教認知科学（CSR）である
- CSRは現在欧米で幅広く行われており、進化生物学や脳科学と連携してさまざまな仮説を検証している
- 宗教学と心理学が協同することで、数多くの研究の可能性が生まれるだろう

参考文献

- 堀江宗正（2009）『歴史のなかの宗教心理学』岩波書店
- 渡辺学（2010）「宗教心理学」星野英紀ほか編『宗教学事典』丸善出版会、158-161頁
- Banerjee, K., Haque, O. S., & Spelke, E. S., 2013. Melting Lizards and Crying Mailboxes: Children's Preferential Recall of Minimally Counterintuitive Concepts. *Cognitive Science*, 37, 1251-1289.
- Barrett, J. L., & Lawson E. T., 2001. Ritual Intuitions: Cognitive Contributions to Judgments of Ritual Efficacy. *Journal of Cognition and Culture*, 1(2), 183-201.
- Barrett, J. L., & Nyhof, M. A., 2001. Spreading non-natural concepts: The role of intuitive conceptual structures in memory and transmission of cultural materials. *Journal of Cognition and Culture*, 1(1), 69-100.
- Boyer, P., 1994. *The Naturalness of Religious Ideas: A Cognitive Theory of Religion*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

- Boyer, P., & Ramble, C., 2001. Cognitive templates of religious concepts: Cross-cultural evidence for recall of counter-intuitive representations. *Cognitive Science*, 25(4), 535-564.
- Bering, J. M., & Bjorklund, D. F., 2004. The Natural Emergence of Reasoning About the Afterlife as a Developmental Regularity. *Developmental Psychology*, 40(2), 217-233.
- Caldwell-Harris, C. L., 2012. Understanding atheism/non-belief as an expected individual-differences variable. *Religion, Brain & Behavior*, 2(1), 4-23.
- Deeley, Q., 2009. Cognitive Style, Spirituality, and Religious Understanding: The Case of Autism. *Journal Of Religion, Disability & Health*, 13(1), 77-82.
- Henrich, J., 2009. The evolution of costly displays, cooperation and religion: credibility enhancing displays and their implications for cultural evolution. *Evolution and Human Behavior*, 30, 244-260.
- Johnson, D., 2015. *God Is Watching You: How the Fear of God Makes Us Human*. Oxford: Oxford University Press.

- Koenig, Harold G., 2012. Religion, Spirituality, and Health: The Research and Clinical Implications. *ISRN psychiatry*, 2012, 1-33.
- Lawson, E. T., & McCauley, R., 1990. *Rethinking Religion: Connecting Cognition and Culture*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McCauley, R., & Lawson, E. T. 2017. *Philosophical Foundations of the Cognitive Science of Religion*. London: Bloomsbury Academic.
- Richert, R. A., Whitehouse, H., & Stewart, E., 2005. Memory and Analogical Thinking in High-Arousal Rituals. In H. Whitehouse & R. N. McCauley eds. *Mind and Religion: Psychological and Cognitive Foundations of Religion*. Walnut Creek: Altamira Press, 127-145.
- Van Elk, M., 2013. Paranormal believers are more prone to illusory agency detection than skeptics. *Consciousness and Cognition*, 22, 1041-1046.
- Whitehouse, H., 1995. *Inside the Cult: Religious Innovation and Transmission in Papua New Guinea*. Oxford: Oxford University Press.
- Xygalatas, D. 2012. *The Burning Saints: Cognition and Culture in the Fire-Walking Rituals of the Anastenaria*. Sheffield, Equinox.